朝日新聞　2021年9月16日

オピニオン＆フォーラム

安らかな最期 選べる社会に

会社員　海津　朋子（千葉県　51）

先日、母が他界した。数年前に肺を患い、昨年末からは在宅酸素を使用し、「日ごと苦しい」と言いながら過ごしていた。17年前に日本尊厳死協会に入会し、延命のための医療はやらないことで、私を含む子どもたちと意思を共有していた。

母は旅立つ少し前に、同協会から届いた会報の記事に深く共感していた。協会の顧問を務める脚本家の倉本聰氏が友人の死について綴ったものだ。友人は2年半ほど前に肺がんを患い、抗がん剤治療などを続けた。苦しくて自殺を図ったが未遂となり、骨にも転移し、今年3月に62歳で亡くなられた。倉本氏は何の力にもなれなかった自分を悔やみ、日本の医療は「人命尊重」を「未だに唯一の金科玉条」として「苦痛からの解放」というもう一つの使命を忘れているのではないかと強く訴えていた。

母は生前、常々言っていた。人間は自らの意思で生まれてくるのではないから、死の時くらいは自分で選びたい。日本でも安楽死や尊厳死を選べる制度が出来たらいいと思うと。母の話を聞くたびに、そのつらさを思って胸が痛んだ。ますます高齢化が進む社会。母の切望した制度が出来ることを望んでいる。